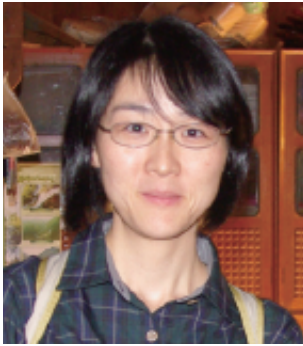


アフリカ熱帯雨林のさとやま

四方 箒 (日本学術振興会特別研究員)
Kagari SHIKATA



1976年大阪府生まれ。京都大学農学部卒業、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程研究指導認定退学。京都大学博士(地域研究)。日本学術振興会特別研究員(PD, RPD)、東京大学大学院農学生命科学研究科特任研究員を経て、2015年より2度目の日本学術振興会特別研究員(RPD)。三児の母。専門は熱帯農業生態学、アフリカ地域研究。アフリカ熱帯雨林における焼畑の調査をとおして、森と人の共存のありかたを探究している。著書に『焼畑の潜在力——アフリカ熱帯雨林の農業生態誌』(昭和堂)。

はじめに

「熱帯の里山」というと、違和感を覚える人が多いかもしれない。「里山」という言葉は日本の原風景を語るさいのキーワードもしくは代名詞であって、熱帯地域の景観を表現する言葉としてはふさわしくないと感じる人もいるだろう。しかしながら、稲作とそれを支える森林がセットになった里山景観は、日本のみならず熱帯アジアの農村地域においても広



写真1 カメルーン東南部の焼畑の景観。バナナ、キャッサバ、ヤウテア、収穫されたトウモロコシの稈(茎)が見える

くみられることが報告されてきた。そうした報告や論文では「ここは日本か、と思うほどの里山景観」(神崎, 2014) というふうに、日本の農村地域との類似性が強調されることが多い。水田とそれを取り囲む山々あるいは人々の努力の結晶たる棚田の美しい風景などは、いかにも「里山」の名にふさわしく、日本の農村を彷彿とさせるものである。わたし自身、昨年から今年にかけてインドネシアとミャンマーの農村地域を訪れる機会があり、日本との共通点を感じるものがしばしばあった。なにより主食はコメだし、ダイズの発酵食品や野菜をふんだんに使った料理など、日本人になじみのある食文化とそれを支える田畑や山の風景、そして農作業に励む人びとのたたずまいには、まさに「ここは日本か」と言いたくなるような里山のエッセンスが満ち溢れていた。

翻って、ここで紹介するのは日本で

も熱帯アジアでもなく、アフリカ熱帯雨林の事例である。筆者はこれまでカメルーンの東南部に暮らす焼畑農耕民バンガンドゥを対象としてフィールドワークをおこなってきた。かれらの焼畑ではイネは栽培されていないし、水田もない。主食はバナナやキャッサバ等のイモ類で、野菜はオクラとトウガラシ以外にほとんど栽培されていない。また、かれらの焼畑は日本の棚田のような整然とした景観とは対照的に、雑草や倒木が入り乱れて作物がどこにあるのかもわからず、カオスの様相を呈している(写真1)。日本人が抱く「里山」のイメージからはかけ離れているとっていいだろう。

しかしながら、近年「里山」ないし「SATOYAMA」という言葉は、水田と山に囲まれた日本の原風景というイメージを越え、「人間の営みによって維持されてきた二次的自然」という広い概念として、国際的な議

論の場においても用いられるようになってきている。鷲谷 (2011) は、集落・田畑・ため池・水路・樹林・草原などの空間的な要素が組み合わせられた、複合的な生態系をひらがなの「さとやま」であらわし、それを「自然の営みと人間活動との合作ともいえるダイナミックなシステム」と表現している。そして、さとやまを構成するさまざまな土地利用がつくりだすパターンを「生態系模様」と呼び、複雑な生態系模様をもつさとやまは、多様な動植物が暮らすことが可能な空間であることを指摘している。このような概念を援用すれば、アフリカ熱帯雨林の焼畑景観は「アフリカ版さとやま」として捉えることができる。

多様な植生と生業複合

はじめてわたしがカメルーンの森を訪れたのは今から10年以上前のことになる。そもそも、わたしはアフリカ熱帯雨林の農耕に興味をもってカメルーンを訪れたのだが、調査を始めた当初、目を奪われたのは、人びとが生活の多くを森に依存しているという事実であった。肉・魚・果実といった食物だけでなく、建材や薬、生活用品にいたるまで、かれらの生活は森の資源なくして成立するものではない。

調査をおこなったカメルーン東南部では、森のなかを南北に走る1本の幹線道路に沿って集落が点在しており、道路からの距離に応じて植生が変化していく。道路から約2 kmの範囲には主として焼畑とその休閑地が広がっており、さらに奥にすすむと、焼畑と休閑地にくわえて、人びとの現金収入源となるカカオの畑、そして原生林とがモザイク状に分布するようになる(ここでいう原生林とは、これまでに農地として利用されたことがない、あるいは利用されたことが記憶されていない森のことを指している)。道路から5 km以上

離れると、農地はほとんど見られなくなり原生林が延々とつづく。森のなかには大小さまざまな川が流れ、川沿いにはラフィアヤシなどからなる川辺林が発達し、ところどころに湿潤草原も分布している。バンガンドゥは、焼畑から作物を得る一方で、特徴の異なる植生域を横断的に利用し、採集・狩猟・漁撈といった多彩な生業活動とおして森からも多くの糧を得て暮らしているのである。

バナナと暮らす

アフリカ熱帯雨林の農耕は焼畑移動耕作、混作、根栽作物の3つに特徴づけられる(小松, 2010)。バンガンドゥの農耕もその例外ではないが、とくに、かれらの生活や農耕を語るうえで欠くことのできないのが、バナナである。

バンガンドゥが食べるバナナには大きく分けて2種類ある。ひとつは、手で皮をむいてそのままぱくりと食べるバナナ。日本でもおなじみの甘くて黄色いあのバナナだ。もうひとつは、プランテンと総称される主食用のバナナ。こちらは皮をむいた後、必ず調理してから食べる(写真2・3)。これこそが、バンガンドゥの毎日の食生活を支えるうえで重要なバナナで、その消費量はざっと計算したところ年間1人当たり380 kgにも達する。これは日本人が消費す



写真2 バナナを調理する女性



写真3 村での食事。蒸したバナナを杵と臼で搗いて餅状にしたもの(右下)を、肉や魚を煮込んだシチューと食べる

る生食用バナナのおよそ50倍の量に相当する。

かれらの畑には、バナナのほかにトウモロコシやキャッサバ、ヤウテア(サトイモの仲間)、ヤムイモなど主食となる作物はいろいろ植えられているが、食卓にのぼる頻度ではバナナがダントツに多い。日本人の主食はコメだと知った居候先のお父さんから「カガリは日本で我慢しているのか? バナナが食べられないなんて、つらいだろう。わたしだったら耐えられないよ」と言われたことがある。日頃、日本製の中古車やバイクを眺めては「テクノロジーの国・日本!」と称え、「いつか日本に行ってみよう」と語る彼だが、バナナの前にあってはコメもテクノロジーも太刀打ちできない。

また、バナナは伝統的な割礼儀礼の場面にも登場する(写真4)。割礼を受けた青年たちは、傷が癒えるまでの1か月のあいだ、毎日3食、20本近くものバナナを完食しなければな



写真4 割礼を受けた青年。身体には樹皮からとれる赤い染料を塗りつけ、ラフィアヤシを裂いてつくった腰囊をつけて1か月すずす。その間、毎食、大量のバナナを食べなければならない

らない。バナナは日々の生活を支えるだけでなく、人生の節目において特別な役割を果たしているのである。

これが畑？

バナナの次に印象的なのが、かれらの焼畑の景観である。バンガンドゥの焼畑では、複数の作物を同じ畑に同時に植える混作が一般的であり、いろんな作物が畝も列もなくごちゃまぜに植えられている。畑のなかには伐開時に伐り残された立木が残り、火入れの後に燃え残った倒木が横たわったまま放置されている。また、雑草が繁茂していることが多く、畑はまるで藪のようになっている。

調査を始めた当初、焼畑の面積や作物の栽植密度を測定しようとしたわたしは、そんな畑を目の前にして途方にくれたものだった。アフリカショウガなどの大型草本が繁茂しているだけでなく、大小さまざまな樹木が立ち並び、縦横無尽に伸びた蔓がからまりあって、どこになにがあるのかもわからない。しかし、バンガンドゥの人びとは、当たり前のようにそこからバナナやキャッサバを収穫してくる。

かれらと同じように畑や森を眺め、感じられるようになりたいと考えたわたしは、かたっぱしから畑を巡って人びとに話を聞き、バンガンドゥの

視線に寄り添う努力を続けた。しかし、こちらが期待するような明快な答えはなかなか返ってこない。除草をする人とならない人、だらだら続く作物の植えつけと収穫、焼畑をいつ放棄したのかわからず、休閑期間も不明瞭……。かれらの曖昧な返事に、バンガンドゥの焼畑システムの全体像を描くことが果たしてできるのだろうか？と不安を募

らせ、悶々とした気分をひきずりながら調査をつづけた。当時のフィールドノートには「ぐちゃぐちゃだ、どうする」という走り書きが残されている。

しかし、かれらの主食であるバナナに注目し、その生産と消費の実態について長期的なデータを収集するうちに、一見するとルーズな栽培管理は、かれらがバナナを安定して収穫するうえで都合がいいやり方なのではないかと思うようになった。

焼畑におけるバナナの周年収穫

バンガンドゥの焼畑は森林を循環的に利用することによって成立する森林休閑型の焼畑である。森（多く

の場合は二次林）を伐開し、トウモロコシ、キャッサバ、ヤウテア、バナナを中心にさまざまな作物を植えつけ、それらを栽培・収穫したあと放棄し、10年以上の休閑を経て再び利用する。ただし、日射を必要とするトウモロコシとキャッサバが成長すると除草されなくなるので、あきらかな休閑に入る前に二次植生が繁茂することになる。作物がまだ生育をつづけているにもかかわらず畑が森へもどるままにしておくのは、それが熱帯雨林という環境におけるバナナ栽培に適したやり方だからである。

バナナは収穫後の保存が効かない。したがって、毎日主食として食べるためには、畑に植えるバナナの熟期を分散させておく必要がある。人びとは年に2回の乾季に新しい焼畑を開くこと、そして1筆の畑のなかでもバナナを植える時期をずらしたり、成長の速い品種と遅い品種を混植したりすることで、バナナが同時に熟さないように工夫している。また、バナナはいったん植えると株元から生えてくる子株によって世代を更新し、成長と結実を繰り返す。しかも、バナナは耐陰性が高いので、藪のようになった畑（写真5）からでも数年にわたって収穫をつづけることができる。かれらが除草に積極



写真5 伐開から3年経った畑のなかで育つバナナ

的でないのは、こうしたバナナの特性と関係している。つまり、膨大な労力を投入してひとつの畑を無理に維持するよりも、適度に手をぬきながら新しい畑をつぎつぎと伐開していくほうが、幅広い生育段階のバナナを確保するためには都合がよいのだ。

このように焼畑は長期間にわたってバナナ生産を継続するため、各世帯は伐開後の年数が異なる複数の畑を同時に管理することになる。ある世帯では、7筆の異なる畑を利用してバナナを収穫していた。いちばん古い畑は伐開から7年が過ぎており、一見したところ、どこにバナナがあるのかもわからなかったが、それでも調査期間中、全収穫量の1割以上のバナナを供給していた。逆にその7筆の中でいちばん新しい畑は、伐開から1年ほどの畑で、将来的にはカカオ畑になる予定ということだった。近年、商品作物カカオの重要性が増しているが、従来の焼畑システムをカカオ栽培にも適用することで、人びとはカカオ畑の拡大とバナナ生産の両立を図っている。すなわち、新たな畑を開くさいにカカオを主食作物と混植し、畑がカカオ林へと成熟していく過程でバナナを収穫しているのである。

焼畑が創り出す生態系模様

バンガンドゥの焼畑の特徴は、作物の栽培期間と二次植生が回復する休閑期間とが明瞭に線引きできない点にある。このような焼畑の環境利用は、攪乱と植生遷移という熱帯雨林が元来もっている生態系のダイナミクスに、樹木の伐採や作物の植えつけをとおして人びとが介入することによって、攪乱地が森へともどる過程のなかで食料生産を実現しているものとして理解できる。

個々の世帯が実践するこうした焼畑の営みは、地域全体としてみると、絶え間なく新しい畑がつくられ、そ

れぞれが森へもどりつづけることをとおして、地域の生態景観のなかに遷移段階の異なるモザイク、すなわち動的な生態系模様を創出する要因となっている。そして、それぞれのパッチに特有のさまざまな資源が、バンガンドゥの生活を豊かなものとしている。

火入れのあと燃え残った木々は薪として利用できるし、作物を食べにくる小動物は罾で捕獲されタンパク源となる。旺盛に回復してくる草本類の多くは薬用に利用され、キャッサバやヤウテアの若葉は野菜として採集される。作物の収穫がひと通り終わり、パイオニア種の樹木が林冠を覆うようになるころ、林床に繁茂するクズウコン科の植物は生活のさまざまな場面で利用できる（写真6）。たとえば、その大きな葉は料理や保存のための包装材となり、長い葉柄は籠や莫産を編むのに使われる。遷移の進んだ二次林内では、伐開時に伐り倒され、すでに朽ちた倒木にキノコが生え、その一部は食用になる。老齢の二次林では畑の伐開後に成長した樹木がさまざまなフルーツを実らせる。そこにはアブラヤシも残っており、ヤシ酒や食用油を採取できる。そのほか薬用として利用できる樹種も多い。

原生林や川辺林といった原植生の多様性にくわえて、焼畑の実践によって創出されるダイナミックな生態系模様が、バンガンドゥの生業複合の基盤となっているのである。

おわりに

経済のグローバル化の影響のもと、画一的なモノカルチャーの農地が拡大をつづけるなかで、さとやま特有のきめこまかい生態系模様は、粗い



写真6 二次林内でクズウコン科の植物の葉を採集する女性

模様への変化の圧力にさらされている（鷺谷, 2011）。バンガンドゥの焼畑が織りなすカメルーン東南部の生態系模様は今後どのように変化していくのだろうか。カカオのモノカルチャー柄が席卷していくのか、あるいは頭痛がするほどわたしを悩ませた複雑なパッチワークが更新されつづけるのか……。

調査を終えて村を去る日になると、居候先のお父さんはきまって「カガリ、バナナが食べられなくなるけど我慢できるかい？」と尋ねてくる。「我慢できるかな？」と不安になってくるから不思議なものだ。バンガンドゥにとってバナナは日常に埋め込まれた存在であり、かれらの生き方でもある。生態系模様の将来は、グローバル化の影響力もさることながら、バンガンドゥのバナナにたいするこだわりにかかっているのかもしれない。

文献

神崎護 2014「森林とその改変」落合雪乃・白川千尋編『ものづくりの植物誌——東南アジア大陸部から』臨川書店 pp.40-55.

小松かおり 2010「中部アフリカ熱帯雨林の農耕文化史」木村大治・北西功一編『森棲みの生態誌——アフリカ熱帯林の人・自然・歴史Ⅰ』京都大学学術出版会 pp.41-58.

鷺谷いづみ 2011『さとやま——生物多様性と生態系模様 岩波ジュニア新書686〈知の航海〉シリーズ』岩波書店